

〔研究ノート〕

## 書簡作成術と修辞学教育 ～ 15世紀後半のインゴルシュタット大学の事例より～

Letter writing and rhetorical education  
at the University of Ingolstadt in the late 15th Century

田 中 圭 子  
Tanaka Keiko

### はじめに

本稿では、1472年にバイエルンで創設されたインゴルシュタット大学を対象として、ラテン語書簡作成技法を含む修辞学の大学教育における位置付けについて検討する。ヨーロッパ書簡史において、ルネサンス期は人文主義的書簡の出現と拡散の時代、つまりArs Dictaminisと呼ばれた中世の書簡作成の定式から離れ、古代の著作家による書簡を模範とする人文主義的要素を取り入れた新たな書簡作成技法が受け入れられていった時代といえるが、こうした変化が生じた過程や時期は地域により異なる。14世紀のペトラルカらに代表されるイタリアにおいて先行し、ドイツ語圏では15世紀後半頃より人文主義者たちによって同様の動きが推進された。その最初期の事例のひとつが、ラテン語詩人として知られたコンラート・ツェルティスによる書簡作成手引である<sup>1</sup>。これは、インゴルシュタット大学の教師となったツェルティスが講義開始にあたって1492年に刊行した修辞学教本の一部であったため、ここでは、大学の修辞学教育の一環としての側面から、書簡作成術を捉えることを試みる。特に、インゴルシュタット大学の開学からツェルティスが教授活動を開始する直前までの時期を取り上げ、修辞学教育を担当した教師による人文主義の受容についても触れてゆきたい。

インゴルシュタット大学（1800年にランツフート、1826年にミュンヘンに移転）の歴史については、18世紀にこの大学に係わる文書史料に基づき大学史を編んだメーデラー、19世紀に大学の通史を著したプラントル以来の研究の蓄積がある<sup>2</sup>。近年の代表的な研究としては、大学創立500年を迎えた1972年前後に公刊された大学史<sup>3</sup>、研究書シリーズLudovico Maximiliane<sup>4</sup>があげられる。本邦においては、別府昭郎による近世ドイツの大学史研究において、インゴルシュタット大学の事例も論じられている<sup>5</sup>。また、本稿の問題関心に沿った研究としては、インゴルシュタット大学の人文主義受容過程を再検討したシュエーのモノグラフが重要である<sup>6</sup>。

これら先行研究を参照しつつ、本稿では、第1章においてインゴルシュタット大学創立の目的と創設期の教育体制について概観する。第2章では、同大学の修辞学教育の担い手と、教育の中で扱われた書簡作成術における人文主義の影響を中心に述べる。最後に本稿での検討を小括し、今後の課題にも言及する。

## 第1章 大学創設の目的と学部構成

後期中世にヨーロッパ各地で相次いで創設された大学は、盛期中世の北イタリアやパリで学生と教師の「組合」(universitas)として形成された諸大学とは異なり、世俗権力が主導して、その威信と政治的利益のために作られた機関であると捉えられている<sup>7</sup>。ヴィッテルスバッハ家のバイエルン＝ランツフト公ルートヴィヒのもとで1472年に開学したインゴルシュタット大学も、その例の一つに数えられるが、ここでは15世紀後半のバイエルンにおける政治的状況をふまえ、より具体的に大学設置に至った理由と目的について確認しておきたい<sup>8</sup>。

バイエルン公家は、1392年の領邦分割以来、バイエルン＝ミュンヘン、バイエルン＝インゴルシュタット、バイエルン＝ランツフトの3系統に分かれていたが、1447年にバイエルン＝インゴルシュタットの男子継承者が断絶したため、バイエルン＝ランツフト公ハインリヒが、その領域の大部分を獲得した。この新たな相続地をも統合した領邦統治体制の確立は、1450年に没したハインリヒの息子、ルートヴィヒ(1479年没)にとっても喫緊の課題であったと考えられる。その対応の一環として、インゴルシュタットに大学を設置することを通じて、もはや領邦君主の宮廷所在地ではなくなったこの都市に、ある種の補償を与えるとともに、新たな君主の支配権のデモンストレーションを行うことが試みられた<sup>9</sup>。また、領邦行政に必要な能力を有し、かつ領邦君主に忠実であることが期待できる官僚の養成も求められており、独自の大学の設立は、この要請に応えるものでもあった<sup>10</sup>。

大学創設を認可する権利をもつのは、まずは教皇と皇帝であったが、ルートヴィヒは、ハプスブルク家の皇帝フリードリヒ3世とは政治的対立関係にあったため<sup>11</sup>、1459年に教皇ピウス2世からインゴルシュタット大学設立を認める勅書を獲得している<sup>12</sup>。その後、大学運営に必要な財政基盤を整える努力を重ねて<sup>13</sup>、1472年に開学が実現した。これによってバイエルン＝ランツフトは、すでに大学を擁するハプスブルク家のオーストリア(ヴィーン大学)や、ヴィッテルスバッハ家に属するとはいえ、バイエルン公家とは系統を異にする家系が統治するプファルツ選挙侯領(ハイデルベルク大学)と同等の威信を獲得したといえる。

だが、ルートヴィヒ自身は、学芸よりはむしろ騎士的活動を好んだ人物であり、大学創設は彼の個人的関心に基づくものとは言い難い。そのための働きかけをまず行ったのは、ルートヴィヒ周辺の知識人、とりわけイタリアで学び、人文主義的素養を身に付けたアイヒシュテット司教ヨハン・フォン・アイヒラであったと考えられている<sup>14</sup>。教皇による設置認可が与えられた年、すなわち1459年の7月からルートヴィヒに仕えたマルティン・マイアも、開学に向けて尽力したひとりであったろう。彼は、ハイデルベルク大学で法律を学び、ニュルンベルク市や帝国諸侯のもとで働いた経験をもつ人物であり、1472年6月26日に催されたインゴルシュタット大学の創立式典では、古典古代の人物に触れつつ、学芸を通じた人間的成長と社会的上昇の可能性について述べた、ラテン語の演説を行った<sup>15</sup>。

開学にあたってルートヴィヒが公布した創設文書<sup>16</sup>によると、インゴルシュタット大学は神学部、法学部、医学部、学芸学部の4学部から構成され、上級3学部の正規の教師(ordinarius)については(少なくとも神学部1名、法学部2名、医学部1名)、創設者であるバイエルン公が任命するものとされた。学芸学部に属する6名の教師(magister)は寮舎

付き教師（collegiatus）であり、そこに空席が生じた場合は学芸学部の教師たちが後任を選任できたが、ひと月以内にバイエルン公に承認を受ける必要があった<sup>17</sup>。聖職禄、もしくは大学からの俸給が与えられる上記の教師たちの他に、正規ではない教師、寮舎付きでない教師も存在し、彼らの授業を受ける学生は聴講料を支払う必要があった<sup>18</sup>。

インゴルシュタット大学が開学した年の7月25日までに、入学登録を行なった人数は、実際には学生や教師としての活動がみられなかった者も含めて489名に上ったといわれる<sup>19</sup>。その後は、年間平均200名程度が登録しており、その大部分は学芸学部で学ぶ学生たちだった。さらに上級の学部に進んで学業を続ける者は多くはなく、法学部の学生が全学の約15%、神学部の学生が約5%、医学部の学生に至っては、15世紀中には合計31名のみ、という状況であった<sup>20</sup>。

## 第2章 修辞学教育と人文主義の影響

本章では、まず中世末期から近世への過渡期にあたる時期の大学教育における修辞学の位置付けを確認し、次いでインゴルシュタット大学の修辞学教育の中で、人文主義的な要素を含む書簡作成術を教授した教師たちについて述べる。

中世の大学における教育課程の基礎となるのは、「自由学芸」（artes liberales）<sup>21</sup>と呼ばれる7科目であり、神学、法学、医学といった上級学部での学業に必要な準備課程として、学芸学部で教授されていた。それら7科目はさらに、文法学、修辞学、弁証学からなる3科目（trivium）と算術、幾何学、音楽、天文学からなる4科目（quadrivium）に区分された。文法学と修辞学は、大学教育全体の中では中心的な地位を占める科目とは言い難かったが、ラテン語の運用能力を身につけることは大学での学問の基礎であったため、学芸学部の教育課程においてつねに必要とされた。

一方、15世紀初頭から、まずはイタリアにおいて、キケロに由来する「人文学研究」（studia humanitatis）という用語が、教育と関連づけて用いられはじめた<sup>22</sup>。幅広い層の人々にとっての新たな教養として受け入れられた「人文学研究」は、具体的には、文法学、修辞学、詩学、歴史学、道徳哲学といった学問を通じて修得しうるものとされ、このような教育を大学等に導入する試みが、イタリアのみならずアルプス以北の諸地域においても相次いで行われた。とりわけ文法学と修辞学の学習を通じて得られるラテン語能力は、学問上のみならず大学の外の社会生活においても有益とみなされ、重視された<sup>23</sup>。授業では新たな教科書が用いられるようになり、古代の作家や同時代の人文主義者の著作を素材に、自ら教材を作成する教師も多かった<sup>24</sup>。

このように、文法学と修辞学は、中世の「自由学芸」とルネサンスの「人文学研究」の双方に包含される学問領域であり、いずれも大学の教育課程の中では、基礎的科目と位置付けられるものである。よって、中世末期から近世の大学において開講されてきた文法学や修辞学の授業の中には、人文主義の導入による質的变化も見られるであろう。

インゴルシュタット大学では、学芸学部の教師（マギステル）の担当科目は、学期ごとに籤で決定された<sup>25</sup>。マギステルは最低でも学芸学部で4年間の学業を修め、2度の試験を経て教師としての資格を獲得しており<sup>26</sup>、この学部の全課程を教えることが可能と考えられていた。そこで書簡作成術を含む修辞学の授業を担当した教師のうち、人文主義的な傾

向をある程度取り入れた先駆者的存在と捉えられているのは、マルティン・プレニンガー<sup>27</sup>とパウル・レッシャー<sup>28</sup>の2名である。

プレニンガーは、1465年からヴィーン大学で学業を修め、その期間に人文主義に触れる機会を得た。1472年のインゴルシュタット大学開学時に、学芸学部のマギステルとなり、1476年まで教育活動を行なった<sup>29</sup>。当時の学芸学部は、スコラ学の伝統を維持し、实在論の立場に立つ「哲学の古い道」(via antiqua)と、14世紀のオッカムを代表とする、唯名論を支持する「哲学の新しい道」(via moderna)の二派に分裂しており<sup>30</sup>、プレニンガーは後者の側に属していた。彼が作成した教材は、いくつかの手稿の形でのみ伝来しており<sup>31</sup>、その中に含まれる「書簡作成術」(Ars epistolandi)は、キケロ風を志向する一方で、書簡を5部構成とするような中世の定式を維持する内容であった<sup>32</sup>。

レッシャーは、故郷エスリンゲンで教師ニクラス・フォン・ヴィーレを通じて人文主義に触れたといわれる。ケルンとハイデルベルクの大学で学業を修め、フライブルク大学で働いた後、1474年にインゴルシュタット大学の一員となった。学芸学部内では「哲学の古い道」に所属し、1478年に二派が統合された後も学部に残っている。彼は『書簡作成のための修辞学』(*Rhetorica pro conficiendis epistulis accommodata*)と題した教本を作成しており、これは1487年にインゴルシュタットで印刷されている<sup>33</sup>。20葉を若干越える程度の小著であるが、全体の3分の2以上が書簡作成術、残りが修辞学と既存の教本からの抜粋という3部構成となっている<sup>34</sup>。キケロを文体の模範とし、ボエティウスやカッシオドールスといった古代末期のキリスト教著作家たちと並んで、ウェルギリウスやマルティアールスなど古代の詩人たちの作品からの引用を例文として掲載している点は人文主義的といえようが、その一方で書簡に関しては、差出人名をつねに冒頭に記す古代の流儀を取り入れず、高位の受取人の名を最初に記すよう指南する、といった点において中世の定式が維持されている。前述のプレニンガーと同様に折衷的な内容となっている理由は、こうした授業を受けた学芸学部の学生、すなわち大学での勉学を始めて日が浅く、必ずしも上級学部に進むことを志望しているわけではない学生にとっては、将来の職業生活を考慮すると、諸侯の宮廷や都市の書記局などで用いられている慣行を知ることの方が重要であったからではないかと考えられている<sup>35</sup>。

このように、まずは学芸学部に所属する教師によって、既存の授業の枠組みの中に、徐々に人文主義的な要素が加えられてきたといえようが、インゴルシュタット大学では開学から5年後の1477年に、学生の要望とバイエルン公の意向により、新たに詩学の講座が開設される運びとなり、その授業の中に修辞学、書簡作成術が含まれていた。最初にこの講座を担当したのはエアハルト・ヴィンツベルガー<sup>36</sup>、その後任はヨハネス・リートナー<sup>37</sup>であった。

ヴィンツベルガーは、バーゼルとパリの大学で学び、キケロなど古代の作品の編纂・出版や詩作を手がける一方で、医学博士の学位も取得している。1476年からインゴルシュタット大学医学部の正規の教師となり、加えて、新規に創設された詩学講座の担当教師にバイエルン公から任命された。彼が残した手稿の中に、詩学や修辞学、書簡作成術に関する授業用のテキストが含まれており、これによると、書簡の作成にあたって中世的な要素はもはや顧みられず、もっぱらキケロとイタリアの人文主義者が模範とされているという。さらに、キケロのほか、セネカ、ウェルギリウスも講義で取り上げられたようである<sup>38</sup>。し



かしヴィンツベルガーによる詩学講座の授業は1478年頃に立ち消えとなり、1480年代初頭には彼自身がインゴルシュタットを去った<sup>39</sup>。

その後数年間、詩学講座は空席となっていたが、1484年からおよそ10年間、その担当を務めたのがリートナーである。彼はライプツィヒやボローニャで学び、教会法博士の学位を得た後、帝国各地の大学を遍歴して教師および詩人としての活動を行っていた。インゴルシュタット大学での授業の内容を知る手掛かりは、彼が残した手稿である<sup>40</sup>。ある手稿の中には、修辞学の講義予告や彼自身による書簡作成術のテキスト、ポッジョ・ブラッチョリーニの書簡作成術やキケロの縁者・友人宛書簡の書写などが含まれており、別の手稿にはホラティウス、マルティアリス、ウェルギリウスらの詩と並んで、詩学の授業の導入のテキストやキケロの書簡などが記されている<sup>41</sup>。リートナーは比較的長期にわたって詩学講座を担当し、その間に俸給も引き上げられていることから、彼の働きは雇用者側から評価されていたことが窺われる<sup>42</sup>。

なお、新設された詩学講座は、学内では4学部のいずれにも属さない、独立した地位にあった<sup>43</sup>。とはいえ、初代担当のヴィンツベルガーは、医学教師と兼任していたため医学部所属とみなしうる。後任のリートナーは詩学講座専任であったが、教会法博士の学位を取得しており、学内の序列としては法学部と医学部の間に位置づけられていたようである。リートナーと詩学講座のポストを争い、1494年からその地位についたコンラート・ツェルティスの時代については、史料が欠落しており詳細不明であるが、この講座自体は、16世紀に入っても学部からは独立した形で存続していた。一方、学芸学部内でも人文主義的な改革が進められ、1526年の新規則において、学部で雇用する6名の教員のうち1名は詩学を担当すると定められた<sup>44</sup>。つまりこの時点において、詩学講座は学部の外と学芸学部内の双方で開設されていたことになる。このようにして、人文主義的な修辞学教育は、大学の中で次第に制度化されていった。

## おわりに

インゴルシュタット大学は、君主と領邦に貢献しうる人材の育成と供給を目的として創設された機関である。そこでは、ラテン語運用能力の向上に役立つ修辞学は、文法学とともに基礎的科目として学芸学部で教えられた。ラテン語を実践的に活用できる分野として、書簡作成術は修辞学の授業の中に取り入れられ、その内容には、学芸学部で学ぶ多くの学生のニーズが反映されている可能性もある。ラテン語の純化を目指し、古典古代の著作家を模範とした人文主義は、必然的に書簡作成術を含む修辞学教育に大きな影響を与えた。まず個々の授業の中に、程度の差はあれ人文主義的な要素が導入されるところから始まり、詩学講座の開設や学芸学部の改革を通じて、人文主義的な教育が大学内で制度化される動きが続いた。インゴルシュタット大学に、人文主義の理想を掲げたツェルティスが登場するのは、まさにその過程の途上であり、教育課程における詩学・修辞学の位置付けが未だ不安定な時期にあたっていたと言える。

大学教育における修辞学の意義については、例えば授業担当者の俸給や学生が支払った聴講料の額、時間割配置などを通じて、より詳細な分析が可能であろうし、他大学や他地域の事例との比較検討を行い、ヨーロッパ全体での傾向を把握することも求められようが、

それらは今後の課題に属する。本稿を通じて、大学における修辞学教育が、知識人官僚層に人文主義的書簡作成術が浸透する回路の一つであったことが確認できたが、それは同時に、彼らの自己形成・自己演出のありようと書簡作成の技法との関係を探究するうえでの一助ともなりうるのではないか、との見通しを述べて結びとしたい。

[付記] 本研究は、JSPS科研費JP18K00107の助成を受けたものである。

## 注釈

- <sup>1</sup> 拙稿「コンラート・ツェルティスの書簡作成術」、『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』56巻、2019年、291～302頁。同「コンラート・ツェルティスの書簡作成手引『Tractatus de condendis epistolis』抄訳」、『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』61巻、2023年、69～74頁。
- <sup>2</sup> Johann Nepomuk Mederer, *Annales Ingolstadiensis Academiae*, 4 vols., Ingolstadt, 1782; Carl Prantl, *Geschichte der Ludwig-Maximilians-Universität in Ingolstadt, Landshut, München. Zur Festfeier ihres vierhundertjährigen Bestehens im Auftrage des akademischen Senates verfaßt*, 2 Bde., München, 1872. 創設期の状況については、Gustav Bauch, *Die Anfänge des Humanismus in Ingolstadt. Eine Litterarische Studie zur deutschen Universitätsgeschichte*, München - Leipzig, 1901.
- <sup>3</sup> Laetitia Boehm / Johannes Spörl (hrsg. v.), *Ludwig-Maximilians-Universität: Ingolstadt, Landshut, München; 1472-1972*, Berlin, 1972; Laetitia Boehm / Johannes Spörl (hrsg. v.), *Die Ludwig-Maximilians-Universität in ihren Fakultäten*, 2 Bde., Berlin, 1972-1980.
- <sup>4</sup> シリーズのうち、本稿に関連する刊行物は、Arno Seifert, *Statuten- und Verfassungsgeschichte der Universität Ingolstadt (1472-1586)*, Berlin, 1971; id. (bearb. v.), *Die Universität Ingolstadt im 15. und 16. Jahrhundert. Texte und Regesten*, Berlin, 1973; Laetitia Boehm / Wilfried Müller / Wolfgang J. Smolka / Helmut Zedelmaier (hrsg. v.), *Biographisches Lexikon der Ludwig-Maximilians-Universität München, Teil 1, Ingolstadt-Landshut 1472-1826*, Berlin, 1998 (以後、BLと略記する)。
- <sup>5</sup> 別府昭郎『ドイツにおける大学教授の誕生—職階制の成立を中心に—』創文社、1998年。
- <sup>6</sup> Maximilian Schuh, *Aneignungen des Humanismus. Institutionelle und individuelle Praktiken an der Universität Ingolstadt im 15. Jahrhundert*, Leiden - Boston, 2013.
- <sup>7</sup> J. Verger, „Universität“, in: *Lexikon des Mittelalters*, Bd.8, Stuttgart - Weimar, 1999, Sp.1249-1255, bes. Sp.1253. クリストフ・シャルル／ジャック・ヴェルジェ、岡山茂／谷口清彦訳『大学の歴史』白水社、2009年、29～30頁。
- <sup>8</sup> インゴルシュタット大学創設の過程については、Rainer A. Müller, „Ludwig IX. der Reiche, Herzog von Bayern-Landshut (1450-1479) und die Gründung der Universität Ingolstadt 1472“, in: Sönke Lorenz / Oliver Auge / Nicola Becker u. a. (hrsg. v.), *Attempto, oder wie stiftet man eine Universität: die Universitätsgründungen der sogenannten zweiten Gründungswelle im Vergleich*, Stuttgart, 1999, S.129-145; Schuh, *op.cit.*, S.12-24.
- <sup>9</sup> Müller, *op.cit.*, S.136, 143; Schuh, *op.cit.*, S.13, 17.
- <sup>10</sup> Albrecht Liess, „Die artistische Fakultät der Universität Ingolstadt 1472-1588“, in: Boehm / Spörl (hrsg. v.), *op.cit.*, Bd.2, Berlin, 1980, S.9-35, bes. S.10; Müller, *op.cit.*, S.137, 142f.; Schuh, *op.cit.*, S.15.
- <sup>11</sup> Müller, *op.cit.*, S.134f.; Schuh, *op.cit.*, S.18.
- <sup>12</sup> *Ibid.*, S.17.
- <sup>13</sup> Müller, *op.cit.*, S.138-140; Schuh, *op.cit.*, S.18-21.
- <sup>14</sup> Müller, *op.cit.*, S.144f.; Schuh, *op.cit.*, S.16f. インゴルシュタット大学設立準備期間にアイヒシュテット司教を務めたのは、ヨハン・フォン・アイヒ（1464年没）とヴィルヘルム・フォン・ライヒェナウ（1496年没）であり、ともにパドヴァ大学で法学を修めている。前者については、Ernst Reiter, „Johannes

- III. von Eych“, in: *Neue Deutsche Biographie*, Bd.10, 1974, S.483-484. オンライン版URLは、<https://www.deutsche-biographie.de/pnd119147696.html#ndbcontent> (最終閲覧2025年1月26日)。
- <sup>15</sup> マルティン・マイアについては、Johannes Laschinger, „Mair, Martin“, in: *Neue Deutsche Biographie*, Bd. 15, 1987, S. 712-714. オンライン版URLは、<https://www.deutsche-biographie.de/pnd119147696.html#ndbcontent> (最終閲覧2025年1月26日)。演説のテキストは、以下に収録されている。Prantl, *op.cit.*, Bd.2, S.7-10. 演説の概要については、*Ibid.*, Bd.1, S.22f.; Bauch, *op.cit.*, S.2f.
- <sup>16</sup> インゴルシュタット大学の創設文書の内容については、1471年末/1472年初頭から、およそ半年にわたってルートヴィヒの顧問官たちにより検討が繰り返され、公布された完成版の文書を含め、5種類のテキストが伝来している。Prantl, *op.cit.*, Bd.1, S.23-32. 最初のテキスト全文、及びその後の4バージョンとの異同については、*Ibid.*, Bd.2, S.10-37. テキストの比較、成立過程に関する分析は、Seifert, *op.cit.*, S.15ff.
- <sup>17</sup> Prantl, *op.cit.*, Bd.1, S.28, Bd.2, S.23-25.
- <sup>18</sup> 創設文書の最初のテキストでは、神学部正規の教師1名には聖職禄が与えられ、大学からの俸給は受けれないこと、法学部正規の教師には120ないし130グルデン、医学部正規の教師には80グルデン、学芸学部の寮舎付き教師には6名合計で240グルデン（但しここから寮舎共通費用が差し引かれる）の俸給が与えられること、学生は彼らの授業を無償で受けられることが記載されていた。これらの記述は、完成版を含むその後のテキストでは削除されている。*Ibid.*, Bd.1, S.24-25, 28-29, Bd.2, S.22-24.
- <sup>19</sup> ヘースティングズ・ラシュドール、横尾壮英訳『大学の起源：ヨーロッパ中世大学史』中、東洋館出版社、1967年、259頁。Schuh, *op.cit.*, S.22.
- <sup>20</sup> *Ibid.*, S.13f., Anm.64.
- <sup>21</sup> Günter Bernt / Ludwig Hödl / Heinrich Schipperges, „Artes liberales“, in: *Lexikon des Mittelalters*, Bd.1, Stuttgart - Weimar, 1999, Sp.1058-1063.
- <sup>22</sup> イタリアにおけるstudia humanitatis概念の展開と教育への影響については、August Buck, “Die “studia humanitatis” im italienischen Humanismus“, in: Wolfgang Reinhard (hrsg. v.), *Humanismus im Bildungswesen des 15. und 16. Jahrhunderts*, Weinheim, 1984, S.11-24.
- <sup>23</sup> 人文主義的教育の、人間社会における有用性を重視する傾向については、*Ibid.*, S.16ff.
- <sup>24</sup> 例えば、創設期のインゴルシュタット大学における文法学の授業の内容、教材については、Schuh, *op.cit.*, S.109-120.
- <sup>25</sup> *Ibid.*, S.45. 他の諸大学においては、籤のほかに年功序列、学部の自由意志によって担当科目の配分が決定された。別府、前掲書、28頁。
- <sup>26</sup> 学芸学部の教師（マギステル）として教えるためには、まず学芸学部で最低2年間学び、公開討論と試験を経てバッカラリウスの学位を取得した後、さらに2年間の学修と公開討論、試験を通じてリケンティアトゥス（教授免許状取得者）の資格を得たうえで、学部に加加入して教師組合の一員として認められる必要があった。同上、24～28頁。なお、リケンティアトゥスが神学部、法学部、医学部のいずれかに加入して教師となった場合はドクトルと呼ばれ、15世紀には所属学部のほか学芸学部でも教えるのが通例であった。同上、37頁。
- <sup>27</sup> 1450年頃生～1501年没。F. J. Worstbrock, „Prenninger (Breminger, Brenninger, Beiname:Uranius), Martin“, in: *BL*, S.318f.; id., „Prenninger (Brenn-, Brem-, Brenningarius), Martin“, in: *Verfasserlexikon*, Bd.7, Berlin - New York, 2010, Sp.821-825; Schuh, *op.cit.*, S.49-56.
- <sup>28</sup> 1489年没。F. J. Worstbrock, „Lescher (Lesgher, Letscher, Löscher), Paul“, in: *BL*, S.240; id., „Lescher (Lesgher, Letscher), Paul“, in: *Verfasserlexikon*, Bd.5, Berlin - New York, 2010, Sp.733f.; Schuh, *op.cit.*, S.57-62.
- <sup>29</sup> プレンニガーは、1476年以降フィレンツェ、パドヴァで法学を学び、両法博士の学位を得た。また、イタリア滞在中にマルシーリオ・フィッチェーノの知己となった。1480年頃に帝国に帰還した後は、法律家としてコンスタンツ司教に仕え、チュービンゲン大学法学部教授としても活動した。
- <sup>30</sup> 1478年に、バイエルン公の命により学部内の統一が図られたが、その後も両派の対立は残存し、1522年の大学改革でようやく終結したといわれる。なお、両派の人的構成をみると、via antiquaはライプツィヒ大学出身者、via modernaはヴィーン大学出身者によって占められていると指摘されている。Schuh, *op.cit.*, S.45.
- <sup>31</sup> *Ibid.*, S.51, Anm.64.

- <sup>32</sup> *Ibid.*, S.51. オーストリア国立図書館所蔵の手稿は、Wien, Österreichische Nationalbibliothek, Cod.3123, fol.2<sup>r</sup>-17<sup>v</sup>. デジタル版のURLは、[https://digital.onb.ac.at/RepViewer/viewer.faces?doc=DTL\\_5950331&order=1&view=SINGLE](https://digital.onb.ac.at/RepViewer/viewer.faces?doc=DTL_5950331&order=1&view=SINGLE) (最終閲覧2024年12月9日)。
- <sup>33</sup> この著作は、ハイデルベルク (1488年)、ケルン (1490年、1495年頃)、デルフト (1496年) でも出版されている。Schuh, *op.cit.*, S.164, Anm.20. ハイデルベルク刊本のデジタル版URLは、<https://www.digitale-sammlungen.de/en/view/bsb00039777?page=,1> (最終閲覧2024年12月9日)。
- <sup>34</sup> この著作の内容の詳細と分析については、Schuh, *op.cit.*, S.162-174.
- <sup>35</sup> レッシャーは、大学からの俸給を受けられる寮舎付き教師ではなかった。より多くの受講生を獲得し、受講料収入を得るために、授業内容を学生のニーズに合わせた可能性がある。*Ibid.*, S.165f.
- <sup>36</sup> 1447年頃生～1493年没。F. J. Worstbrock, „Windsberger (Ventimontanus, Aeolides), Erhard“, in: *BL*, S.483f.; id. / Julia Bauer, „Windsberger (Ventimontanus, Aeolides), Erhard“, in: *Verfasserlexikon*, Bd.10, Berlin - New York, 2010, Sp.1206-1211; Schuh, *op.cit.*, S.65-72.
- <sup>37</sup> 1445年頃生～1493/94頃没。F. J. Worstbrock, „Riedner, Johannes“, in: *BL*, S.343; id., „Riedner, Johannes“, in: *Verfasserlexikon*, Bd.8, Berlin - New York, 2010, Sp.67-70; Schuh, *op.cit.*, S.73-78.
- <sup>38</sup> Schuh, *op.cit.*, S.71f. 手稿はバイエルン国立図書館所蔵。München, Bayerische Staatsbibliothek, clm 28824. 書簡術 (Modus epistolandi) は、fol.198<sup>r</sup>-202<sup>r</sup>. この手稿について、筆者は未見である。
- <sup>39</sup> バイエルン公は、ヴィンツベルガーに対して詩学教師よりも自身の侍医として働くことを望んだようである。だが、ヴィンツベルガーは不吉な内容のホロスコープを提示したことで宮廷の不興を買い、インゴルシュタットを去った後はザクセン公やハンガリー王の宮廷に仕えた。
- <sup>40</sup> ミュンヘン大学図書館に、手稿2点が所蔵されている。München, Universitätsbibliothek, 4° Cod. ms. 527, 2° Cod. ms. 544<sup>a</sup>. これらの手稿について、著者は未見である。
- <sup>41</sup> Schuh, *op.cit.*, S.75ff. リートナーの書簡作成術については、学生が筆写した手稿も伝来しているという。
- <sup>42</sup> *Ibid.*, S.77.
- <sup>43</sup> 大学組織の中での詩学講座の位置付けについては、Liess, *op.cit.*, S. 23; Schuh, *op.cit.*, S.78-82.
- <sup>44</sup> Liess, *op.cit.*, S. 28-29.